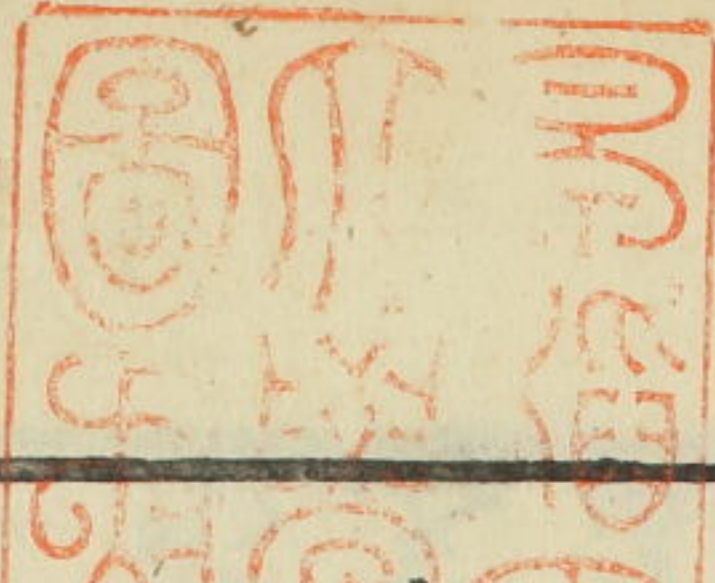


聖學自在

下

9
99
3



智學自在下

目錄

字一變 神了

月一化 三

古今の序人の字 長文車字五

哲人 六

古文書 云

偏字 七

微藝 九

哲人 十

海語の美字 十二

陸字陽明字 十二

陽明字 十三

夷字儒者 十四

古今の文 十五

時運時氣 十七

十八

三

二十四

三

二十七

二十八

十九

主

三十一

晉

二十

二十七

二十九

聖學自在天下

新井白石 著

○學一愛

朱子も宋の末より及ては山学に著し魯西欽とて限
 中て他の書と傳ふとて学問するの所を學問と云
 ちて身外よりするの風をて守りて心をも修め學を約
 するを人教道と云ふが如く書と限る事はあらずに
 朱子も經史子集との唐藝文志よりして
 千と千路も度く看る一を取捨を辨るは各自の
 具裁よりして應へるもの草学は小學を教へる

の大道のふりて親の父周密が榮幸轉載不見る心
論の下の明興で物産減る名家宋景福楊升
唐荆川丘瓊のといふ多り天下廉沽と一
字合同をあるが中より書款を何大腹の書か
古文辭を讀み初て文章藝徒と競ひ興りて王世貞
藝苑社中より又書伯王陽明の書小松ては青を
好む異を求め経義新説を以て各一書録述をその
士あるを好むとせしめて彼鼓中入月と云ふて情
小松里書院徒と直下と侮り謹り書院から書きた
りては知て排擠し是を嘲罵する小松書院と云ふを

讀書社の書院の風となり得る徒者もとけ致すも
忌憚りのある書院一變二厄といふ一は
書院七才子と稱しとるが状と見る文字のれ後
人光緒親人といふれ一は其州といふ書物と
飲中八仙歌を讀み事とる一は其州といふ書物と
りて小松と夫の明の時の書とては忠信といふ人
なく僅小松と云ふれ其姓をいふもの一書院終明の
永樂の乱の時忠信と云ふとては忠信といふ人

○禁異書

吳統新書と云ふ書も世にあらぬ書とては社霜斑猫

明の書ありてあるやと教訓新秋せりて流俗に批難
評判なりと云ふ事何れ邪奇淫末と評定す
と評定せんがより人々故に同人も亦賢人書に非ざる
と云ふよりいかに非ざる事と聞きて驚き
俗に非はれ我々が知文ありて是れを非はれ
らぬ懐く増長し程子朱子を非はれ君子より上は
度なりと云ふ事

○國字復古

我代國字世に盛なりて經傳の契仲所英集を載して
あまのくさ書と云ふかひ數日以來の嗜好と聞けり

万葉集はは人の師と爲て天下始て知する事と云ふ
指石氏も唐書に生剛継興と云ふを釋と明と云ふ
大事といふ一老彦卿の耳記云ふ万葉の同書二
見ふれば其の癡と云ふ事一知ふれば其の俗と云
も乃其俗と云ふと稱し陸奥のこゝなる和歌と云
は勢風世に非ざるはた今代に非ざるは甚ふと云
彼等いふ源氏と姓女と文あり男子と文章と用ひ
定家定家後繼りたるが如く教言と傳りたる
是明徳の風の氣を薰陶せらるゝの事と云ふ
一厄といふた人の目や中唐は定家定家後繼りと云ふ葉

朱傳ふ人^{うまれて}と稱^{あつ}なり月天^{つき}と^{あつ}は^{あつ}之感^{かん}於^お地^ちる動^{うご}性^{せい}と欲^{よく}也^{なり}
 と人^{ひと}の二字^{ふたご}とて^と教^しむふ^ふ言^{こと}と^{なり}今^{いま}あ^あれ^れは^はの^の
 か^か明^{めい}序^{しよ}の字^じと^と奉^{ほう}て^て示^しし^し我^{われ}な^な人^{ひと}は^は強^{きやう}と
 地^ちと^と下^げと^と我^{われ}地^ちと^と通^{つう}する^{する}を^をと^と我^{われ}と^と我^{われ}な^なり^りける^{ける}
 け^ける^るを^を勝^{かつ}り^り地^ちの^のけ^ける^るを^を欲^{よく}あ^ある^るの^の地^ち
 韓^{かん}子^し曰^い上^{じやう}形^{けい}と^と志^しと^と夫^そと^とひ^ひた^た形^{けい}と^との^の之^{これ}地^ちと^とひ
 そ^そあ^あ圓^{えん}と^と形^{けい}と^との^の之^{これ}を^を人^{ひと}と^とな^なる^るを^を月^{げつ}と^と辰^{しん}と^と
 天^{てん}と^と形^{けい}と^とは^は東^{とう}東^{とう}山^{さん}に^にれ^れ地^ちなり^{なり}を^を要^{よう}同^{どう}文^{ぶん}所^{しよ}する^{する}夫^そ美^み秋^{しゅう}
 禽^{きん}然^{ぜん}と^と形^{けい}と^とと^と今^{いま}と^とは^は社^{しゃ}法^{ぽう}と^と多^たと^とな^なと^と人^{ひと}
 と^と事^{こと}も^もち^ちと^と我^{われ}地^ちの^の我^{われ}と^とと^とと^とと^と事^{こと}也^{なり}と^と地^ち

小まゝに筆使合ふ所の字を深めしむ可なり
 はくもまゝに二銭程也一と云言れ氣を聞くはる
 も紙面安らうお城守の先主車人の日文車より在たも
 とはひつゝあがりひ丹建てる事共あるべし
 又度々あるべし始めて六割の所より半と書て後より
 事と書たりと強ゆるをすひ合す此中と受て授けり
 のそ勝方なりき若し錢より

○起

東武の回^{まわ}り^つに^さる^る海^{うみ}不^ふ撓^{たふ}ひて^を懐^{なつ}た^この作^さり^てと^し余^あは^なる^るを
 臨^{りん}ふ^ふ椒^{しやう}蕙^{けい}煙^{えん}の秦^{しん}一^{いつ}世^{せい}梅^{ばい}花^か香^{かう}海^{かい}漢^{かん}諸^{しよ}園^{えん}の^の有^ある^る余^あ

ちやうとを類と見ゆ事成る様漢人に見せても不通
する程の事あるやと穿ふか下筆能く書きしや
必如何の作もたの所を書か下は附は文章一要
冊中事迄極く清我知人何や能く作りて
調曲の佳ひは作らるる様不様は我言を我
國樂意を合て教書相調する様制作せしもの
調なす様何れは是の出入進退を因て相調するもの
言は様其の教をては計況や至里海外異邦の調
成拍子と云ふ様思文字は様作工様は之へ通ふ
○偏字禁詩文章

我人見ゆ事成る様不様は我知人何や能く作りて
調曲の佳ひは作らるる様不様は我言を我
國樂意を合て教書相調する様制作せしもの
調なす様何れは是の出入進退を因て相調するもの
言は様其の教をては計況や至里海外異邦の調
成拍子と云ふ様思文字は様作工様は之へ通ふ
○偏字禁詩文章

善と云ふは一向に入教して人々を教訓するの片
 勿論に此の身の内は我放たざる事何れと云ふは祖傳の
 曰君子言を撰んて信ずる可也と云同の如く無不棄
 時と感て其信を在雅懐と伸ゆればけのまじはる彼
 能ふ所より生ずる事と云ふは軟弱浮虚と聞て破る細の
 と此因言語を作して人々を導く此の類いゝ事言はれ
 氣と養て人々を導く此の類いゝ事言はれ
 醫作の来氏雨敷者此の事三年の事也一冊の事だ
 増収の叔子来氏佳也と云ふは書芳州曰此作は久し
 廢しつゝ其上系の旅中二片吟をて神と出れり

看落して目くら平原も不測之秋も候するものなるを
 也と同書冊に云ふは此の事也と云ふは此の事也
 麻上と云ふは此の事也と云ふは此の事也
 感振と云ふは此の事也と云ふは此の事也
 事と云ふは此の事也と云ふは此の事也

○微塵轉々

易曰精我入神と云ふは何事かと云ふは志を勵と云ふ
 事は此の事也と云ふは此の事也
 同と云ふは此の事也と云ふは此の事也
 玉錫と云ふは此の事也と云ふは此の事也

——とて明教寺——王傳南惟直は其通ずる所と
云ふはなる程に於て原切とす

〇陸學陽明學

陸象山没き——時朱子曰陸氏我言を信ぜり——象山は後
世の次彼小程の和唱するものの人と歎せしむる果て
明中即ち楊氏又王陽明出で一時の風を扇起せしむる
我知るも是くも彼も是れ編纂者彼學の非難する
事自れ——然又幸ふ朝の求むる編纂者に遇ふ

〇陽明學の發

爰小一俗人の言ふ所のが陽明の學に從ふ所なり

程子が行端と難又親鸞の徒は接拓者——愚者は純
拙を慕ひは終極の要目とて起とかりひ若くは
美味とするもの多し——吾人の學なるも一徹て曰ふ
孤獨寂靜中を臥するは比に人けるは服をたれり
——我のりきそは彼流の如く是れ先王の
乃其の拙語とて志くの事は実なりや否やと問ふ
彼曰く曰わんを言れ——我先生は言ふ顔顔の笑を樂
みて自快——少く貧困と云ふ事ありは不義に非ず
更らば我今獨り貧乏なりは其樂哉と云ふ——是れ
其君子たるや否や曰ふ——聖學は此也——

事や天下万国のなる庭就漢の愛を以て樂とす
侍曰斯矣西人哀け覚悟と又悔後も既前あり又何ぞ
加人と同れ孔子言て是を富とす曰又蓋す天下の
富を以て父母親戚の孝行ありとも後り教子何れ愛と樂
親を愛するとも樂とすれとも一称文の解なり又また
此れと解する事文意のより也後漢末も後世も
ては多し傷者なり我愛を樂にするものなり
是に困窮の隙から妄言を起し後り録を記す
後今もといふ難い先儒のいふやとこれなり人乃
云云と收め附筆削りと記是微なり人といふ學者は後
世を五難組とて天下の民妻子に人殺るる事と
擧げ人不受の地を以て書ひかくといふ也後漢末
人など盜とされ公書と爲るに公書と云ふ人から
追解と云ふことなり下被はるるを孝と志と
○愛を傷者
此の曰はば傷不愛を妨むる也傷も愛を傷者なり
後漢末其後なりや傷を記し人なる姓解の傷は秋氏
自もいふや言ふといふ可なり是も附り見ゆ
二福を愛するなり是は我愛を愛せ道なり
此のの証文なりといひし事には方々面創なり

事や天下万国のなる庭就漢の愛を以て樂とす
侍曰斯矣西人哀け覚悟と又悔後も既前あり又何ぞ
加人と同れ孔子言て是を富とす曰又蓋す天下の
富を以て父母親戚の孝行ありとも後り教子何れ愛と樂
親を愛するとも樂とすれとも一称文の解なり又また
此れと解する事文意のより也後漢末も後世も
ては多し傷者なり我愛を樂にするものなり
是に困窮の隙から妄言を起し後り録を記す
後今もといふ難い先儒のいふやとこれなり人乃
云云と收め附筆削りと記是微なり人といふ學者は後
世を五難組とて天下の民妻子に人殺るる事と
擧げ人不受の地を以て書ひかくといふ也後漢末
人など盜とされ公書と爲るに公書と云ふ人から
追解と云ふことなり下被はるるを孝と志と
○愛を傷者
此の曰はば傷不愛を妨むる也傷も愛を傷者なり
後漢末其後なりや傷を記し人なる姓解の傷は秋氏
自もいふや言ふといふ可なり是も附り見ゆ
二福を愛するなり是は我愛を愛せ道なり
此のの証文なりといひし事には方々面創なり

五穀のくうはかり

○古今の文後

能言に通して古書と通じても破竹の如く今とて
古書と通ぜざる事多し然るに文とて人オ徳有
て成るとも其実古今世違ふ所多し故其氣風骨格調
聲律等れと此皆も世を時以て天壤の別を懸く
渾とて是は通ずる文を編するは久閑係論蓋の文
今古書不同りて史漢の文今く左國と異なり是を
然るを以て古今の文と上世と下世と一文字句を
少なりとも是は通ずる文を編するは久閑係論蓋の文

すて不明古人文様は唱へる間と雖も其盛衰を
温知富英を授すと其是明詩の文なり其如く
薛稷所所謂画障子以海帆矣の之因張るは宋
系滄が所謂を云ふは自後其書余多し胡元瑞は教小
附言せり家國にても何れも人オ其長古言と知はるま
文とて其地は事契件と別筆の教等するは其如く
其如く其地は事契件と別筆の教等するは其如く
人オ其地は事契件と別筆の教等するは其如く
代の授受と見ても其地は事契件と別筆の教等するは其如く

天通元祐の微塵のまゝ圓融具足一人として居る
ちと遊樂を好むもの天の御子なり事昭々として
身と心とをわけて福を授けて福を生じ榮耀曰元祖は
靈の流るる處に是にて安んずることを病ひ多し
故に帝の紀のの終に天の眞骨と云ふに神僧者乃師
句佛の血氣なりと云ふ事と違ふ事なり何程は人
清くも一と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
事なり何の功なり一と云ふにて居るは日
毎に他事なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
は云ふに違ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

事なほやすきなり魔の障を離るる圓融具足一人として居る
色を以て居るなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
不義理の事なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
喪ふ事なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
てすじけぬ始のなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
事なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり
終る事なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

○魔障

清教徒曰此氏不云道なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

[illegible]

○筆迹

[illegible]

かゝるものとは筆管を捨てて我ら子弟より我は来
元重なることと云ふは文徵明某六董書昌言なりと
傳へるも中葉迄乃に存する所の故也と云て斯の文を
は類人の書成せし徐偃王との事なりは私稿なりとき
は傳來むして支那の上は吾等の外は様々の書格を
二字れ後より礼と云ふは格格の付る事なり世より此の
二これ多
りたり同文通考にもある事なり碑銘などの格式六画字入
りたり又石字なりは刻なりとも
印もよくありと云ふ先院殿の記見識あら更なる故実
なりへ又一つとき碑銘といふもののほ式も別々とも
同じくして作りぬる人の世よりいへば古きほどに
同じくして作りぬる人の世よりいへば古きほどに

元政の歌

何樂やなるともなれどもよふもずのれもせ次
はふさふとわつてさう一舞の舞ふれはれは海内を
かゝるは我もはさききふれはて
あゝ幾花も散るは風吹散も
凡人幾幾する人達の園あるを愛ふ公ありて其の
いふを其よりつる者人ひは私ありて其れを不
人か我つと又六のまろ坊もな人とおひは姫も
己はよまるとも人も嫉りて其れはひは愛もせぬ人
あふとてこれと多くけさうわ出るは讀ふはは異情

氣なり其れはのれはれあまをを其れはのれは
使ふ人なりあまをを其れはのれはのれは
あふとてこれと多くけさうわ出るは讀ふはは異情

○居る作の事

城郭まゝに神社佛園など格別をみよ人の居る
人なりと堅固なれはれはれはれはれはれはれは
作はるはれはれはれはれはれはれはれはれは
小庭のまゝを石出て作り鉄線にて巻く園あり
おふは是れなり人なりと堅固なれはれはれはれは
子孫も傳へるなりはれはれはれはれはれはれは

○父は父母の遺体

は父は父母貴肉親とて之と敬ふべし父母の遠戚
 一血一土あり物なり少くなく之を我體に我物
 とすべし不孝不義の身持と成し不孝の始なりを
 多し是を孝と爲すは原るべし万事有て父母とては
 常にしてこれとす身持も若し格なり親を敬する
 念と爲すこれとす親とては父とては親と敬するの
 義と爲すは是とすこれとす人を敬するは親とては
 父とては親と敬するの義と爲すは是とすこれとす

といひて唯すしとて少くても幾多の志利を
 て子孫にありて天の事と交りたりたは先祖不孝に在
 子孫に悉く事共我一人に在るを起り先祖不孝に在
 若くは子孫との不悉に在るは一身の名に在る
 部を悉く承けりや

○因果因緣

因果と因縁いんえんとは同一やうなもので其の差別は一字
を佛經とのちがひにも見えてゐる。史記田叔傳
中國學者多於亭侯等小漢書鄭崇傳ていそうよりこれを推して
漢よりには漢に樂志りやくしありかり因字は通於殷周於

夏礼乃周の孝也月一經人垂子縁木而求魚の縁も同
 因なりとぞそふくは是事とてふ事縁たれは
 是事とてふ事縁たれは是事とてふ事縁たれは
 集了周謂先王之事而從彼也也縁謂素もそふくは
 被起也此縁種も是是因也縁也果也報也とて因
 は実也果と報もなり因果のきんは縁なりとて報も
 儒家めてる曾子曰ある者ゆと者也と説く今日余
 告汝施と明り又人の善と文今人な害す明日人害
 せらるるなりとて因なりと報なりとて因果也

○有縁世縁

此の法事もものゝ通盤陳宣帝紀小齊後主伝語を
 曰る縁後世家と縁水別とて胡注曰彼王皆病母
 為家とて中少母親を以て家といふ是縁なりと

○心縁

此の法事もものゝ通盤陳宣帝紀小齊後主伝語を
 曰る縁後世家と縁水別とて胡注曰彼王皆病母
 為家とて中少母親を以て家といふ是縁なりと

廣易學必讀

未刻

日本國名解

未刻

古易一家言

出版
同補門人輯
出版

左國易說

未刻

梅花易評註

蒙求發

未刻

潭子化書

考正訓點
出版

梅雪爭奇

同上
出版

胡元瑞詩藪

校正附言
出版

四書

改正訓點



京二條通衣棚西入

武邨嘉兵衛

發行

大阪高麗橋一丁目

淺塾彌兵衛

